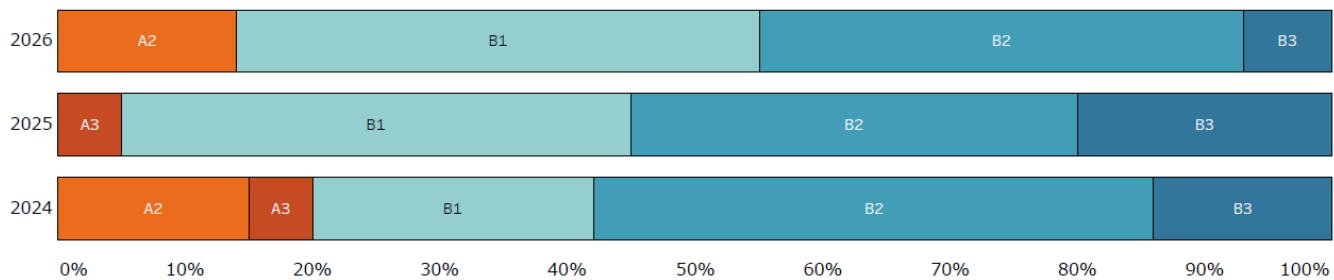


## 2026年 市川 算数（第1回）

過去3年の思考コード別出題割合は次のようにになります（Aは基礎的な知識・技術、Bは論理的な思考力が問われる問題。数字が大きいほど難度も高い）。大問5題構成である点、作図が出題された点は例年通りでしたが、2025年と比べると取り組みやすい印象を受けました。大問2までを確実に得点して、大問3～大問5をどれだけ取れたかによって差がついたと思います。



大問1は、2025年、2024年と同じく、計算1問、一行題4問の構成でした。ミスをすると差を付けられることになります。どれも確実に得点します。（3）は一瞬手が止まるかもしれません、平均点が最も低くなる組み合わせにすることで答えにたどり着けます。（4）は、図をはり合せたときにできる「内側」の多角形に注目します。答えは「13枚目」となる点に注意します。大問2は、流水算の問題でした。類題に取り組んだことのある受験生も多いと思います。大問1、大問2までは確実に取っておきたいところです。

大問3は、道順を調べる場合の数の問題でした。2022年の市川（第1回）と同じく、会話の流れに乗っていきます。ア～エは確実に得点しておきたいです。ここでは、「力」「キ」がポイントです。5個の場合、 $2+4=6$ （通り）となります。つまり、正三角形が□個の場合、「正三角形が□-1個の経路」 + 「正三角形が□-3個の経路」と一般化することができます。10個の場合なら、正三角形が9個の経路と正三角形が7個の経路を合計する形となります。

大問4は、市川で頻出の作図問題でした。作図の対策をしてきた受験生は多かったと思いますが、（1）、（2）と続く従属形式のめずらしい出題でした。円周上の点を見つけると、まずは中心と結びたくなると思います・・・(^\_^;)。ただし、AOを結んで終わりではなく、さらに延長して反対側の円周まで直線を引きます。すると、Aを頂点とする長方形の対角線となります（対角線を含めてちょうど6本の線を引くことになります）。（2）は、（1）で考えたことを応用する形となります。

大問5は、各位の数を操作する問題です。（1）は実際に操作してみると、あっさり見つかります。（2）、（3）は残り時間との相談になると思います。（2）は「2回の操作で1となる数」です。300以上の中で最小を求めたいので、百の位が3となる数に注目して考えます。（3）は「3回の操作で1となる数」ですが、考え方方は（2）と同様となります。

大問2までを確実に得点して、大問3ア～キ、大問4(1)、大問5(1)を取っておきたいです。あくまで予想ですが、大問3ク、大問4(2)、大問5(2)(3)を落としたとしても、およそ7割には達することができると考えられます。